

〔巻頭言〕

看護実践研究の公表に向けた支援

研究科長 奥村 美奈子

本学看護学研究科は、平成16年に開設され本年度で15年目を迎えた。看護学研究科は、個人の尊厳と人権の尊重を基盤に据えた利用者中心のケアのあり方を追究し、広い視野から看護実践の改革を積極的に推進できる創造的・先駆的な指導者層の育成を教育理念に掲げている。平成30年度末の時点で、大学院修了者は博士前期課程141名、博士後期課程15名に達しており、多くが岐阜県内の看護実践や教育の場において活動を続けている。様々な機会を介して、活動の場は異なっても、多くの修了者が大学院での学びをもとに、さらに発展させながら活躍している様子を確認している。また、実践現場の複雑で混沌とした状況に身を置き、時に悩みながらも、利用者中心のケアを基軸に、職場のリーダーとして活動する修了者の姿に出会う度に、看護学研究科の15年間の取り組みが、県内の看護実践現場に徐々に浸透していることを実感する。

このような修了者の活動の基盤には、大学院3年間で修士論文として取り組んだ看護実践研究がある。本学看護学研究科が推進している看護実践研究は、看護実践をベースとした看護学研究方法の一つである。この研究方法は、看護実践現場で活動する看護職者が、看護実践の改善・改革を担う当事者として、所属する施設や部署の実践上の課題を明確にし、利用者中心のケアを追究しながら、現場の看護チームと協働して課題解決に取り組み、その成果を明確にするものである。本学の紀要では、第13巻から投稿資格に大学院修了者を加え、修士論文の成果を公表している。19巻1号までの7年間に掲載された修士論文は、原著20編、研究報告11編、資料2編を数え、看護実践研究の貴重な成果が着実に集積されている。

一方、紀要に投稿した修士論文が掲載に至るまでには、査読者と紀要編集委員会における複数回の検討が必要である。看護実践研究は、課題の明確化から取り組みの評価までに複数のステップを踏み、課題解決に向けた方法も複数用いられるといった特徴がある。そのため、修士論文の研究手法も複雑で、取り組みの過程で得られるデー

タ量も多い。私自身、査読者として、また共著者として、修士論文が公表する研究論文となるよう向き合うたびに、研究の成果を損なわないように内容を精選するためにどう工夫するか、また、多忙な中で論文の公表に向けて懸命に取り組んでいる修了者に対してどのように伝えるかなど、思い悩むことが多い。多くの修士修了者にとって、紀要への投稿が初めての研究論文の投稿となる。そのため、修了者が査読結果と向き合い、論文の推敲を重ねる中で、公表に値する論文として精度を高めることの難しさや厳しさを学ぶとともに、自らが取り組んだ研究の意義や価値を再確認する機会となるようサポートすることが必要である。そして、苦勞の末に完成した研究論文が公表されることは、修了者の自信となり、次の活動を推進していく原動力となると考える。また、修了者が3年間かけて取り組んだ貴重な成果が公表されることは、看護実践現場で課題解決に取り組んでいる多くの看護職者に示唆を与え、看護の改善に寄与するものである。そのため、修了者が修士論文を紀要に投稿し、着実に研究論文として公表できるよう、紀要編集委員会と看護学研究科が連携していくことが重要であると考えます。

また、看護実践研究に関する新たな動きとして、昨年9月に「岐阜県看護実践研究交流会」が組織移行し「看護実践研究学会」が設立された。この学会は、看護実践研究の発展を設立の趣旨とし、本年9月に開催が予定されている第1回看護実践研究学会学術集会に向け準備が進められている。設立間もないため、学会が実施する諸活動については検討を重ねているところであるが、近い将来、看護実践研究学会誌の発刊も予定されており、これによって大学院修了者が取り組んだ看護実践研究の公表の場が一つ加わることになる。そのため、従来通り紀要編集委員会との連携を継続するとともに、新たに設立された「看護実践研究学会」とも緊密に連携し、大学院修了者の研究論文の公表が促進されるよう取り組んで行く必要があると考える。